



DLAの目的

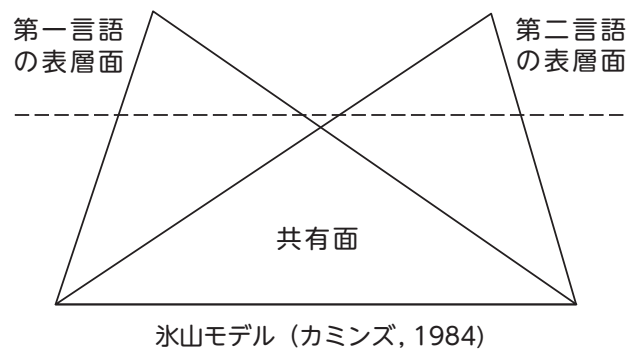
- ・ DLAは、多文化多言語の子どもが、自分自身が持っているすべてのことばを使って「何ができるか」ということ、また、「一人でできること」だけではなく、「支援を得てできること」を、対話を通して多角的かつ包括的に把握することを目的としたアセスメントツールです。
- ・ 覚えた日本語の知識だけを点数化、序列化するためのテストではありません。
- ・ 子どもがどのように学んでいるか、その学びはどのような支援があれば促進されるのか、どうすれば学習意欲を喚起できるのかなどを、さまざまな支援を与えながら、一対一で対話することによって捉えるためのものです。
- ・ そして、得られた情報をその後の学習の指導・支援に役立てることを目的としています。

DLAの対象

- ・ DLAは、原則として言語形成期にある小中学生を対象としています。ただし、改訂版では、社会的要請に応じて高校生にも応用できるようになりました。
- ・ 一対一の対話で最低限の受け答えができたり、文字の習得が進みつつある子どもから、年齢相応の会話力や読書力を身につけている子どもまで、複数言語環境で育つ幅広いレベルの子どもを対象としています。

何を評価するのか(言語能力観)

多文化多言語の子どものことばの力は複雑に絡み合い、互いに影響し合っていると言われています。カミンス（1979）は、この複数のことばの関係を「言語相互依存説」と呼びました。



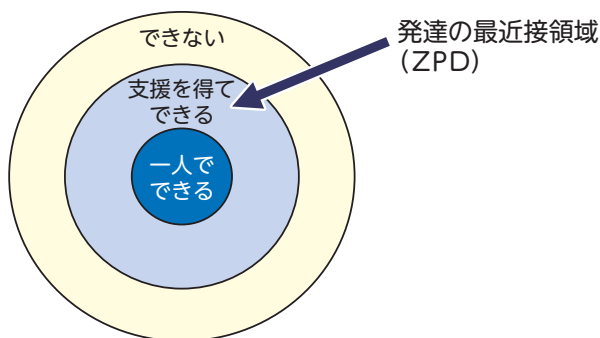
例えば、ポルトガル語で「地球温暖化 (aquecimento global)」という概念を知っている子どもは、日本語でも同じ概念を理解しやすくなるように、子どもの頭の中では複数のことばがつながっているのです。つまり、発達途上にある子どものことばの力を正確に把握するには、日本語だけでなく、母語でも何ができるかを見ていくことが大切です。そのため、DLAは日本語と同じ形式で母語でも評価できるような構造になっています。DLA実施者が子どもの母語ができる場合は、多言語で評価を行うことが可能です。

また、多文化多言語の子どもは、日常会話には問題がない一方で、教科学習の場面では困難を感じる 경우가よくあります。カミンス（2001）は、この状況を踏まえ、ことばの力を「会話の流暢度」、「弁別的言語能力」、「教科学習言語能力」の三つに分けて考えることを提案しました。「会話の流暢度」は日常的な場面で簡単な会話をする力です。「弁別的言語能力」は、文字や文法規則などの知識とスキルを指します。「教科

学習言語能力」は、教科学習に必要な複雑な文章を理解し使う力を意味します。ここには教科学習場面で使用されることばだけでなく、取り上げられる概念そのものの理解や活用も含まれます。これらは、もともと BICS (Basic Interpersonal Communicative Skills) と CALP (Cognitive Academic Language Proficiency) として知られており、日本では「生活言語能力」と「学習言語能力」として紹介されることも多くあります。DLA では、この三つの側面から子どものことばの力を多角的かつ包括的に把握することを目指しています。

どうやって評価するのか(言語評価観)

DLA は、支援を活用しながらことばの力を評価します。子どもが一人でできることだけでなく、助けを得てできることも測ります。このように、評価中にサポートをしながら子どもの学びの可能性を探る方法を「ダイナミック・アセスメント」と呼びます(ハイウッド&リッツ, 2007)。これは、ヴィゴツキー(1962/2001)の「発達の最近接領域 (ZPD: Zone of Proximal Development)」という考えに基づいています。ZPD とは、子どもが周囲の大人のサポートを受けることで、一人では難しい課題もできるようになる学びの活動領域を指します。DLA では、DLA 実施者が子どもに合わせてタスクや質問を工夫し、必要な支援を行って子どもが持つ力を最大限に引き出します。これにより、その子どもに適した効果的な支援方法も明らかになるという「学習のための評価」、「学習としての評価」という側面も併せ持ちます。



ヴィゴツキーの「発達の最近接領域 (ZPD)」のイメージ図

DLAの構造

- ・改訂版 DLA は〈はじめの一步〉と〈聞く・話す〉〈読む〉から構成されています。〈はじめの一步〉はあいさつや身の回りの質問に答える「導入会話」と、絵カードを使って55の子どもの日常に関わる語彙を答える「語彙力チェック」からなります。
- ・〈聞く・話す〉は「基礎タスク」「対話タスク」「認知タスク」の3つに分かれています。「基礎タスク」は、日常的な場面で必要な語彙・表現の習得や文を作る力を、「対話タスク」は状況に応じて子どもが自ら話し、会話をリードする力を、「認知タスク」は教科に関連した語彙・表現を使いながら、まとまりのある説明をする力を評価します。
- ・〈読む〉は1冊の短いテキストを読む過程を通して読書力を測ります。10冊のテキストから子どもに合ったレベルを選んで、読む様子や読解力を対話を交えて観察します。子どもが楽しんで読書に親しめるように設計されています。
- ・DLA では、すべてのタスクを実施するのではなく、常に子どもの状況に合わせて選んで行います。
- ・〈はじめの一步〉は5分程度、〈聞く・話す〉は10～15分程度、〈読む〉は10～25分程度で、すべて実施したとしても1コマ(45分)以内に終了します。
- ・必要に応じて、母語でのDLAも積極的に活用してください。

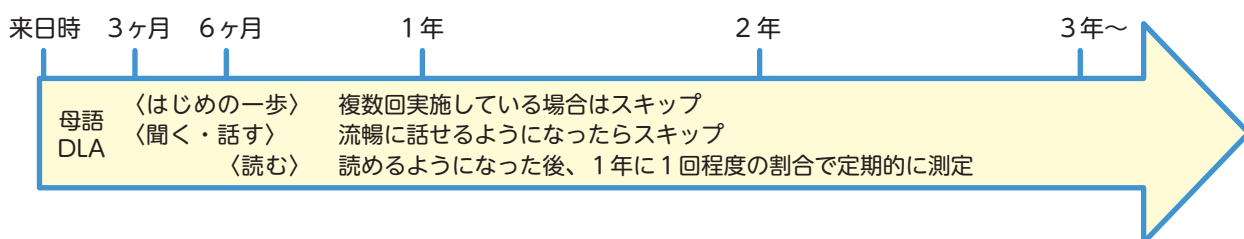
評価の方法

DLAを通して観察した子どものことばの力を、「ことばの力のものさし」に示された記述文に基づいて評価します。評価には「思考・判断・表現を支える包括的なことばの力（複数言語での力）の発達ステージ」（以下、「包括的なことばの発達ステージ」）と「日本語固有の知識・技能の習得ステップ」（以下、「日本語の習得ステップ」）の2つの軸を用います。「包括的なことばの発達ステージ」のほうは、日本語のDLAの結果だけではなく、母語の力も推定しつつ、最大限の力を包括的に捉えて評価します。これにより、日本語の習得状況だけでなく、子どもの年齢に伴うことばの発達状況を捉えることが可能となります。

このような記述文を用いたパフォーマンス評価は、測りたい力を直接測定できるため、妥当性が高いと言えます。一方で、評価者の主観に左右されやすく、誰が評価しても同じ結果になる信頼性が課題となる場合があります。そのため、DLA実施者が経験を積み、評価スキルを向上させることが重要です。また、一人で評価を行うのではなく、子どもの指導や支援に関わる複数人が集まり、DLAの様子やそこから読み取れる子どもの状況を共有し、学習・指導計画について協議する場を設けることが望まれます。

いつ、どのDLAを活用するのか

DLAを用いた評価は、例えば、来日時、滞日3ヶ月、6ヶ月、その後は1年おきなどのスパンで、状況に応じて実施してください。



来日時：通常、来日してすぐの子どもに対して、日本語でのDLAは実施できません。可能であれば、子どもの母語で〈はじめの一步〉や〈聞く・話す〉を実施し、学習を支えることばの力がどのくらいあるかを把握します。母語でのDLAが難しい場合は、保護者からのヒアリングや日頃の観察から母語の状況を把握します。高年齢の子どもには、DLAとは別に母語で作文アセスメントを行い、学習・指導計画に役立てます。

転編入時：前の学校で身につけた日本語の力を確認するため、子どものレベルに応じて、日本語で〈はじめの一步〉、〈聞く・話す〉、〈読む〉を実施します。必要があれば母語でも実施します。

来日後3ヶ月、6ヶ月：来日してからの期間が短い場合は、3ヶ月おきぐらいの頻度で〈聞く・話す〉を実施してもかまいません。ただし、まだ日本語での発話が難しい子どもに対して無理に実施しないようにしましょう。〈読む〉は年齢によって習得のスピードが大きく違うため、子どもの実態をよく観察しながら、実施するかしないかを決めましょう。

年度の開始・終了時：1年に1回程度の割合で実施し、学習・指導の振り返りや計画の検討に活用します。ただし、〈聞く・話す〉は日常的な会話が流暢に話せるようになったら、結果に変化が見られなくなってくるのでスキップしてかまいません。その場合は〈読む〉を重点的に実施しましょう。

年齢による違い：読む力が十分に育っていない低年齢の子どもには、〈聞く・話す〉を中心に実施します。一方で、高年齢の子どもには、滞日期間が短い場合は、〈聞く・話す〉と〈読む〉の両方を行い、話す力が十分に習得できている場合（「ことばの力のものさし」のステップ5以上が目安）は〈読む〉のみを実施します。

特定の課題が見られたり、個別の支援を検討する時：子どもの様子に気になる点が見られた場合、その子どもが安心して学べる環境を整えるため、多角的に情報を集める手段として〈はじめの一步〉〈聞く・話す〉〈読む〉を実施します。必要に応じて母語でも行います。

DLA実施と評価のフローチャート

DLA 〈はじめの一步〉（5分）

導入会話

語彙力チェック

DLA 〈聞く・話す〉（10～15分）

＊カードを選んで実施

基礎タスク

レベルに応じて終了

対話タスク

認知タスク

レベルに応じて終了

DLA 〈読む〉（10～25分）

- ・テキスト選択
- ・予測・推測
- ・指定箇所の音読、その後、最後まで読む（音読 or 黙読）
- ・あらすじ再生と内容理解確認のやりとり
- ・読書に関する質問

＊状況に応じて、子どもの母語でも実施

録音・録画したデータを聴き（見）ながら、評価メモを使って、子どもが「できること」、「支援を得てできること」を振り返ります。

その内容を「ことばの力のものさし」の記述文と照らし合わせ、日常の観察を含めて、子どもの「ステージ×ステップ」における現在の力を評価します。詳細については、「ことばの力のものさし」の実践ガイドをご参照ください。